

ゾウによる事故【Accidents with Elephants】

http://www.upali.ch/accident_en.html

ゾウによって、多くの事故が起こっているか？

ゾウによる数件のひどい事故が起こらない年はない。我々は、ヨーロッパおよび北アメリカの動物園とサーカスにおいて、毎年、3～4人のゾウの飼育係が死亡していることを知っている。それに加えて、重傷を負ったいくらかのゾウの飼育係とサーカスの人は、身体的あるいは精神的理由のために、ゾウと一緒に、もはや働くことはできない。



どこで、事故が起こったか？

2005年の冬に、ウィーン動物園（Vienna Zoo）のゾウ舎の主任は、若いオスゾウ（Abu）に攻撃され、致命的な負傷を負った。

2001年春、チェスターの動物園のゾウ飼育係（男性）は、メスゾウを獣舎から外の放飼場に連れ出す際に、メスゾウに殺された。

バーゼルの動物園で、若いゾウは、外科処置の後に、飼育係に重傷を負わせた。このゾウ飼育係は、（寝室を）隔てる堀の中に飛びこんだことで助かった。

2001年夏、チェコ動物園の飼育係（男性）は、メスゾウの治療の間に、足のチェーンにつまづいて転んだ際に、メスゾウに殺された。

2001年秋、ロンドン動物園で、経験豊かなゾウ飼育係が、放飼場で倒れた際に（倒れた理由は不詳）、メスゾウに殺された。

なぜ、事故が時々、起こるか？

どうして、何度もゾウによる事故が起こるか？については、いくつかの理由がある。

1：ゾウとヒトの間には、強度（強さ）において、非常に大きな相違がある。一方は、

大きくて重いゾウであり、ヒトは、ゾウに比べると、弱く壊れやすい（もろい）。

2：別の理由は、ゾウの群れの階層構造のためである。ゾウの飼育係は、ゾウたちの中で、第一位の地位を獲得しなければならない。そして、ゾウの飼育係は、何度も何度も、その地位を確認しなければならない。

3：オスゾウのマストは、甘く見られたり（過小評価されたり）、あまりに遅く気が付く。

事故は、いつも攻撃によって起こるか？

ヒトとゾウとの間の意見の相違（思い違い・かん違い）は、悪意を伴わずに致命的な結果を引き起こす可能性がある。農場やウマの厩舎で起こっていた典型的な事故例としては、ヒトと動物（牛馬）が同時に、狭い出入口を通り過ぎようとする時に起こる事故である。ほんのわずかな運で、その飼い主は、自分のウマやウシにより骨折することもあるだろう。それは、ゾウの場合の事故では、ほとんど確実に致死的原因となるだろう。

また、悪意のある攻撃があるか？

不幸な意思の相違（思い違い・かん違い）の他に、自分の飼育係に対する悪意ある攻撃もまたある。ゾウたちの階級性の強い集団構造は、ゾウたちの個体間で頻繁な口論と闘争をもたらす。ゾウたちは、自分たちの飼育係をゾウとみなすので、飼育係は、何度も何度もゾウの群れの中における自分の地位を確認し、獲得（発達・発展）しなければならない。



どうすれば、攻撃を避けることができるか？

ゾウの飼育係は、自分のゾウを十分に（素晴らしい）訓練することにより、この目的を達成するだろう。ゾウたちが自分たちの飼育係に十分な尊敬（敬意）と信頼（信用）を持っている場合にだけ、ゾウたちは、階層構造の中で飼育係の地位を認めるだろう。

それにもかかわらず、なぜ攻撃が発生するか？

思春期（青春期）の若いゾウたちは、ゾウの群れの中で権力闘争をする。そして、新人飼育係は、安定した群れの構造の「邪魔者」となる。このことは、衝突（闘争）の原因となり、悲惨な事故の原因となるだろう。

結局のところ（つまり）、ゾウは危険か？

しかし、何度も何度も、また、「思いがけない」事故が起こっている。どんな前兆も、または、明らかな理由もなく、ゾウが自分の飼育係に攻撃をした時点まで、ゾウは、その飼育係をずっと、信頼し親密であり続けていた。そういった思いがけない攻撃の後に、関係者全員は、ショックを受け、ゾウの「異常な行動」の説明を探す。そのとき、関係者は、たびたび、ゾウは、未知の理由のために「めっちゃめっちゃになった（急に調子が変わった）」と言う。

しかしながら、攻撃の理由は、通常、謎であり続けるだろう。ひょっとすると、短い瞬間、ゾウの中の獣（けだもの）が姿を現すのかもしれない。そういうわけで、動物園とサーカスの飼育係たちとの親密性と、訓練にもかかわらず、依然として、ゾウは極めて危険な動物である。

何が、オスゾウを危険にするか？

オスゾウのマストの徴候は、しばしば、甘く見られる（過小評価される）。まだ、外面の徴候（側頭腺分泌）が目立つ前に、一部のオスゾウは攻撃的になる。もし、安全対策が設置されていなかった場合には、最も安心な（おとなしい）オスゾウの獣舎ですらも役に立たない。多くの場合は、自分が飼育するオスゾウに関して、「私のオスゾウは、私に何も危害を加えないだろう」という信念により甘く見られる（過小評価される）。この信念は、生命にかかわる（とりかえしのつかない）誤った考えであろう。

そして、何が、若いオスゾウを危険にするか？

また、飼育係たちの直接飼育下で、メスゾウの群れと共に、まだ生活している若いオスゾウたちは、事故を引き起こすだろう。実際のところ、この若いオスゾウは、すでに、他の動物園で生活していなければならない。しかし、若いオスゾウのための申し分のない新しい住み場所を見つけることは、しばしば、非常に難しい。構造上、および／または財政的な理由のために、ほとんどの動物園が、ただ1頭だけのオスゾウを飼育できるだけである。

マストは、いつ、初めて起こるか？

若いオスゾウの最初のマストの徴候は、たぶん、早くも約7歳で起こるだろう。このことは、この年齢の若いオスゾウは、オスゾウ用の獣舎に慣れていなければならず、そして、ゾウの飼育係は、間接飼育（防護接触：Protected Contact）によって、オスゾウに直接触らないように管理しなければならない。

事故は、オスゾウでしばしば起こるか？

数年前まで、オスゾウたちが、まだサーカスで芸をして、メスゾウたちのように飼育されていた時には、オスゾウによる事故は、非常に煩雑に起こり、回避不能であった。幸いにも、そのような事故は、安全計画を実施している施設では、今日では、まれである

「悪い（有害な）」ゾウはどうなるか？

事故は、人間と動物の双方に悲劇的である。

自分の飼育係を殺したり、重傷を負わせたゾウは、しばしば、殺される。この殺処分は、ゾウに対する信頼が崩壊したために行われる。自分の飼育係を殺したゾウは、他の心的葛藤が生じた際に、おそらく、再び、自分の飼育係を殺したり、負傷させるだろう。

シカゴの動物園のオスゾウ（Ziggy）は、自分の飼育係を攻撃した後（飼育係は幸運にも助かった）、30年間、ゾウ舎の中だけで飼育された。誰も、外の地面に、このオスゾウを連れ出す勇気はなかった（あえてしなかった）。このオスゾウは、（寝室を）隔てる堀の中に落ちた後、1975年に死亡した。



どこで、最近の深刻な事故が起こったか？

2005年2月20日、ウィーン、ゾウ舎における悲劇的な事故

2005年2月20日（日曜日）、午前10時40分、ウィーン動物園のゾウ舎主任（男性：Gerd Kohl：39歳）は、若いオスゾウ（Abu）に攻撃され、ひどい負傷を負った。主任飼育係は、ヨーロッパで最も経験のあるゾウ飼育係として評判で、彼は、やっと4歳になるかどうかのオスゾウ（Abu）の世話をずっとしてきたうちの1人であった。実際に、ウィーン動物園で2001年4月25日に、このオスゾウが産まれてからずっと世話をし訓練してきた。

事故は、毎朝のゾウのシャワーの間に起こった。1600kgのオスゾウ（Abu）は、突然、主任飼育係を攻撃し、壁に押しつけ、牙で突き刺した。救助があまりに遅かったので、主任飼育係は、ひどい負傷を負った。このオスゾウは、現在、攻撃的時期を迎えており、青年期のオスゾウにおいて、このような予測不可能な行動は普通に見られる。この時期は、オスゾウを母親から離乳させ、「間接飼育あるいは防護飼育（protected contact）」に関して、個人的な調教師により準備する時である。すなわち、今後は、そこにおいて、間接飼育下（防護飼育下）で世話をする。「防護飼育（protected contact）」は、飼育係がゾウと直接触れないことを意味する。安全性の理由により、世話、訓練や他の全ての交信を、いつも遠くから行う。

新聞発表、2003年2月20日、ゾウの飼育係が殺された。

2003年2月19日（水曜日）の朝、ハイルバーレンベーク（オランダ）のサファリ・ビークゼ・ベルゲン（Safari Beekse Bergen）のゾウ飼育係の1人（男性）が、彼の毎日の作業中に、アフリカゾウによってひどく負傷した。彼は、ただちに、すぐ近くの病院へ運ばれたが、そこで、夕方死亡した。飼育係たち、職員、経営者と園長は、深い哀悼の意を家族に伝えた。

4人の飼育係は、サファリパークのメスのアフリカゾウ（5頭）と一緒に働き、日々の日課である訓練の間に、ゾウのうちの1頭が、その頭部で飼育係を強打した。この飼育係が、その後、よろめいて、倒れたので、ゾウは頭部と足で彼を攻撃した。1人が救急車に電話する間、他の2人の飼育係は、負傷した同僚をゾウ舎から運び出した。負傷した飼育係は、20分以内に入院した。

水曜日の朝の訓練の間、このゾウの急激な逸脱した行動の原因となったかもしれない異常は、何も気が付かなかった。サファリパークの経営者は、事故の原因を求めて調査を開始し、労働者検査当局（labour inspection authorities）に報告された。飼育係やその他の職員の外傷のためには、治療者（レスキュー）が役に立つ。このゾウたちは、しばらくの間、屋内に留められるだろう。そして、そこには、市民は全く近づけないだろう。

ピッツバーグ護民官の概説、原因は、決して解らないだろう、2002年11月19日（火曜日）

どうして、普通おとなしいメスゾウが、経験豊かな調教師を殺したか？については、決して解らないだろう。ピッツバーグ動物園（Pittsburgh zoo）の20歳のゾウは、調教師（男性：Michael Gatti）を殴り倒して、頭部で地面に押しつけた。動物園を認可するアメリカ農務省（U.S. Department of Agriculture）の広報担当（Jim Rogers）は、調査されるだろうと述べた。ゾウの群れを率いるメスゾウは、一般的に、よりおおらかで、オスゾウよりもヒトに気に入られたがっていると専門家は言う。

米國中の動物園のプロのゾウ調教師たちは、この調教師の死にショックを受け、悲しみを表明した。「ゾウ調教師たちは、固く団結した社会とグループである」と、元ゾウ調教師であるオハイオのコロンブス動物園（Columbus Zoo）の副園長（Don Winstel）が言った。この副園長（Don Winstel）は、現役の間、2回、ゾウの攻撃により入院した。オレゴン動物園（Oregon Zoo）の元ゾウ調教師である副園長（Mike Keele）は、23年前、メスゾウに攻撃された。アメリカ動物園水族館協会（American Zoo & Aquarium Association）の広報担当（Jane Ballantine）は、ゾウ調教師について、「非常に危険な仕事である。」「あなたがたは、野生動物と共に仕事をしている。野生動物は、何をしでかすかわからない（行動の予測は不可能である）。常に野生動物と共に居るヒトは、行動を読み取ることができるだろう。しかし、あなたが望んでいない方向に、ゾウたちが向かうことが起こりえる。」と説明した。調教師は、ゾウを制御するために、直接飼育と間接飼育（防護飼育）の2つの方法を用いるとこの広報担当（Jane Ballantine）は言った。ピッツバーグ動物園では直接飼育を用いており、この方法は、調教師が、ゾウと直接、身体的に接触する。間接飼育（防護飼育）は、飼育係とゾウの間にバリア（障壁）が、存在することを意味する。